かったはずであるが、安心してしまったのか、記憶に残っていることは少ない。やはりばたばたしていたんだなと思う。当日の記念写真を見ると、自分は若かったなあという思いが真っ先に浮かぶ。このときに参加いただいた多くの方がその後も

「常連」として毎年顔を合わせられるのは、水草研究会ならではと思う.最近は参加者も増え、運営の仕方も変化せざるを得ないが、水草研究会らしさは残していきたいものだと思っている.



第15回全国集会一大津一を振り返って、2つの「もしも」

浜 端 悦 治(琵琶湖研究所)

1993年7月24日・25日に琵琶湖岸で開催した第15回全国集会では、87人もの方々に参加して頂くという盛況ぶりであった。少し時間が経ち、あまり記憶も定かではないので、ここでは2つの「もしも」ということに限って開催当日のこととその後の琵琶湖の水草状況についてふれてみたい。

そもそも集会に90名近い方々が参加して下さったのは、たぶん、県のセミナー船「みずすまし」を利用して琵琶湖を縦断するエクスカーションを計画していたからではないかと思っている。会場となった私どもの研究所は琵琶湖の南端、大津の湖岸にあり、大津港を出て、北湖の近江八幡市の宮ヶ浜と沖島とに挟まれた水深5~7mでの水域

を経て、最北部の東岸部にある湖北町の尾上付近に船で向かうというエクスカーションのルートを考えていた。ただ、船の定員が約30名ということで、仕方なく2隊に分け、1隊は船で、もう一隊はバスで尾上に向かい、午後は船とバスとを乗り換えて大津に戻る計画にしていた。陸上ルートでは八日市市付近の布施溜や宮溜といった溜池でのサンプリング等を考えていた。

参加された方々は、乗船を楽しみにして来られたことと思うし、計画した側も、近江八幡市や尾上付近では、7月上旬に行った予備調査などからオトメフラスコモやヒロハノセンニンモ、ネジレモなどの生育を確認していたので、それらを見て

頂くことを目玉に考えていた.しかし,野外調査の常ながら,天候が味方をしてくれなかった.琵琶湖の調査では雨ならまだしも,強風となると太刀打ちが全くできない.水草研究会の全国集会としては7月という比較的早い開催であったにもかかわらず,なんと台風4号が25日に中国地方を横断するという暴挙にでた.台風の足が遠かったので25日には晴れ渡ったが,湖上では風が強く,早朝の5時ごろから船長と電話でやりとりをしたが,結局船は出してもらえなかった.そのため満席のバスで,乗用車で来られていた方にまで車を出していただくという状態での,陸上ルートのみのエクスカーションとなってしまった.

一つ目のもしもは、「台風が来ていなければ、湖上ルートのエクスカーションを楽しんでもらえたのに」残念でならないというものである。ただし、全国集会の余韻がさめてゆっくり反省したとき、計画通りには運ばなかったものの、もし船が全員乗船できるほどに十分大きかったなら、バスの予約はしなかっただろうし、それでいて船が出せなかった時のことを考えると、曲がりなりにも事故もなく行事を終えることができたのは不幸中の幸いというべきかもしれないという結論にはなったが。もう一つのもしもは、開催が一年遅れていたらということである。

翌年の1994年は全国的に高温,少雨であり,琵琶湖集水域のほぼ中央に位置する彦根気象台でも,年降水量は1,137.5mmしかなく(平年比の69%),1894年以来第2位の少ない値を記録した.特に梅雨期間の彦根の降水量は平年比の31%に留まり,また7,8月の月平均気温と月間日照時間は高く,いずれも第1位の記録(それぞれの統計期間は1894~1994年と1986~1994年)を更新する例年にない猛暑となった。そのため,琵琶湖の水位は6月初めにマイナスとなって以降低下を続け,9月15目には観測史上最低のB.S.L.-1.23mを記録するに至った。

7月には南湖東岸にコカナダモの100haにもお

よぶ流れ藻の浮島が出現し(写真1),さらに水位 の低下に伴い、ネジレモ等の浅水域に生育する群 落が露出しはじめ(写真2)、普段は容易には目

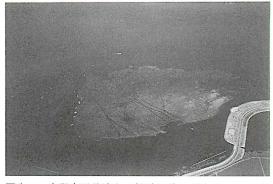


写真1. 南湖赤野井湾入口付近に浮かび上がったコカナダモの巨大な流れ藻. 環境室の測定によると,この流れ藻の浮き島の面積は100haに達したという(1994/7/25,滋賀県環境室撮影).



写真2.1994年夏の渇水で、水面に姿を現し始めたネジレモの大群落.沈水植物があまりないと思われていた南湖で、北湖以上に密度の高いネジレモの群落が浅水域に見られた(1994/8/13(湖面水位-84cm)、草津市新浜町で撮影).

にすることのできない水草を観察するにはもってこいの状態となった.上記のネジレモの群落のほか, コウガイモの群落や, それらの中にオオトリゲモ(写真3)や, さらには絶滅したと考えられていたゴハリマツモなどを南湖でも見ることができた. 琵琶湖での開催がもしも1年あとであれば,こうした水草の状態を見たり採集したりと堪能してもらえたのではないかと, 悔やまれてならない.

夏の水位低下は、沈水植物に被害を与えるのでは無いかと心配したが、逆に水位低下と透明度の増加は、水草の生育条件を改善させる結果となったようで、夏から秋にかけて開花しているクロモも多く見ることできた。この1994年の渇水の際に琵琶湖研究所では全湖岸域での沈水植物帯の面積の把握を行ったが、さらに水資源開発公団は1997・1998年に同様の把握を行っている。さらに昨年の2000年の夏も渇水状況となり、9月10日には一97cmにまで低下し、その際にも面積把握を行った。こうした3回の調査から明らかになったのは、特に南湖(琵琶湖大橋より南側の平均水深3.5mの

比較的浅い副湖盆域)ではクロモやホザキノフサ モといった在来種を中心とした沈水植物帯が増加 してきていることであった。 先の渇水以前はコカ ナダモなどが夏に流れ藻になることはあっても. 富栄養化による透明度の低下などから沈水植物帯 が広い範囲で分布することはなかったと記憶して おり、1994年の渇水から水草の状況が大きく変わっ てきているようだ、戦前の南湖の状態が、「湖底 全域を水草が被いつくして | (ただし4m以深は 冬期にエビモが繁茂)いたといわれており(山口, 1943). かつての南湖の状況に戻りつつあるので はないかと思っている. 水草の繁茂が植物プラン クトンの増殖を抑えることも知られており、 渇水 を契機として起こったかもしれない南湖での水草 帯の増加は、南湖生態系の転換点になる可能性も あり、今後も注意深く見ていく必要があるようだ.

第15回全国集会の後、滋賀県には琵琶湖博物館もできており、琵琶湖の繁茂した水草帯の様子ともども、研究会の方々にぜひ一度見ていただきたいと思っている。



写真3. コウガイモの群落中に見られたオオトリゲモ (1994/8/13撮影,草津市新浜町の琵琶湖岸で撮影).